シルクロードの国際交易都市スイヤブの成立と変遷

―キルギス共和国アク・ベシム遺跡の調査(2022)―

櫛原 功一 帝京大学文化財研究所准教授平野 修 帝京大学文化財研究所研究員山内 和也 帝京大学文化財研究所教授・所長

The Foundation and Development of Suyab, an Ancient Multicultural Trading City of the Silk Road:

Excavation of Ak-Besim, Kyrgyz Republic (2022)

KUSHIHARA Koichi Associate Professor, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University HIRANO Osamu Researcher, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University YAMAUCHI Kazuya Professor, Director, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University

1. はじめに

帝京大学文化財研究所とキルギス共和国国立科学アカデミーは、2016年より継続的にアク・ベシム遺跡の調査研究を実施している(図1)。このアク・ベシム遺跡は中央アジア、天山山脈の支脈であるキルギス・アラトー山脈北麓にあるチュー川流域に位置する5~13世紀の都市遺跡である1)。遺跡は交易都市スイヤブ(第1シャフリスタン)と、隣接する唐の軍事拠点、砕葉鎮(第2シャフリスタン)で構成され、仏教寺院址3箇所、キリスト教会址2箇所などが存在する。

2016~19年には第1シャフリスタンの街路地区 (AKB-13区)、第2シャフリスタン中枢部(AKB-15

区)で調査を実施した。2020年の調査は新型コロナ感染症の拡大のため中止となったが、2021年にはリモート調査が第1シャフリスタンキリスト教会址(AKB-8区)で行われた。2022年、2年ぶりに合同調査が再開され、4月24日~5月17日の約1ヶ月間、AKB-8区とAKB-15区で調査を実施した(**図**2)。

なお 2022 年調査は科学研究費「シルクロードの国際交易都市スイヤブの成立と変遷―農耕都市空間と遊牧民世界の共存―」(代表:山内和也)の補助金を得て行われ、併せて龍谷大チームによる第 2 仏教寺院の調査、遊牧民の遺跡分布調査、考古医科学班による聞き取り調査などが実施されている。

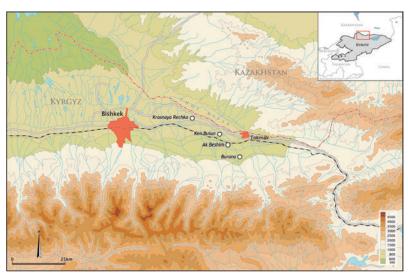


図1 アク・ベシム遺跡の位置



図2 調査地点(1966年航空写真)

2. キリスト教会址(AKB-8区)の概要

第 1 シャフリスタン内の南東隅に立地するこの遺構は、 $1996\sim1998$ 年にセミョーノフが調査を実施し(山内・岡田 2020)、 $2000\sim2001$ 年にはヴェドゥータヴァらが追加調査し、現在までに建物全体の構造が判明している。中央アジアではきわめて大規模な東方キリスト教会である(図 3)。このほか、第 1 シャフリスタンの城壁外に $7\sim10$ 世紀の第 1 キリスト教会址およびキリスト教徒墓地(AKB-3 区)が存在する。

キリスト教会址は日干しレンガと大型ブロック状のパフサ・ブロックで造られた南北約 160 m、東西約70 m の長方形の建物群である。東西に長い複合体Aを中心に複数の部屋構造が連結し、中庭を囲むように構成されている(図4)。

複合体 A は部屋 1~9 からなる。東西に細長いホール(部屋 3)の東側に壁龕をもつ祭壇室(部屋 2)があり、それらの周囲を細長い附属室が囲んでいる。部屋 3 の北側には床面に甕 15 個を埋設したワイン醸造(貯蔵)の部屋 8 があり、部屋 2 の東側にも同じく甕の設置痕をもつ部屋 7 がある。また南東隅の部屋 4 は水槽、受水槽を備え、ここでブドウを搾る作業が行われたことが推測されている。複合体 B は祭壇室 21 および附属室(部屋 22~24、29・30)からなり、大中庭に面している。複合体 C は祭壇室(部屋 25)および小中庭からなる。また複合体 D は祭壇室とみられる部屋 27、28である。

出土した遺物にはコイン、ネフライト製十字架(部屋5)、大甕(部屋8)、多数の鎧小札(部屋20上層の灰溜りほか)、十字架を描いたスタンプ状土製品(部屋22・27)、皿形ランプ(灯明皿、部屋23)、羊皮紙が綴じられた書物(聖書か?)のヒンジ(部屋24)、鉄鏃(部屋28)などがある。

教会址の年代については、出土コインにより部屋 3 の下層床面が 10 世紀以降、部屋 1 上層床面がカラハン朝期と推定されたほか、部屋 8 の大甕口縁のスタンプ文はカラハン朝期とされる。また部屋 2 の天井画のロゼットは敦煌石窟との類似性から 10~11 世紀代、鉄製の小札、鏃、青銅製のバックルなど数多くの武器もまた 10~11 世紀代と推定されている。すなわちセミョーノフは教会址の創建段階を 10~11 世紀とし、建設時期は第 1 期(複合体 A の建設および B・C の増築)、第 2 期(床の改変、部屋 4・7・8 などの建設)の 2 時期とした。

その一方で、カラハン朝時代にはすでにこの教会は「キリスト教会」として機能しておらず、遊牧民などが居住に用いていた可能性が高く、また、都市としての第1シャフリスタンが衰退に向かっていた時期にこの教会が建設されたとすることも疑わしいとする見方もある。それゆえ、山内らは781年にチュルク族の王がキリスト教に改宗し首都大司教の教会を建設したというティモテの書簡に注目し、AKB-8区がその教会ではなかったかと推測し、今後の調査で再考すべきと指摘した(山内・岡田 2020)。



図3 AKB-8区(キリスト教会址)全景

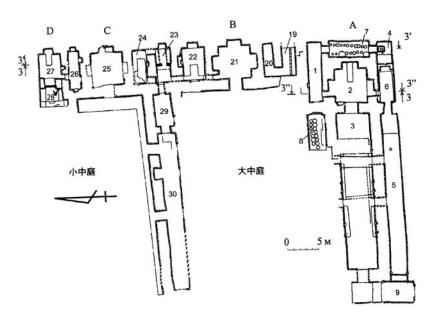


図 4 キリスト教会址(山内・岡田 2020)

2021年のリモート調査では教会址南側で調査が行 われた結果、壁ぎわに教会廃絶後と考えられる竈や炉 などの居住痕跡が検出されたほか、滑石製十字架が発 見されている。

3. AKB-8 区の調査概要

2022年の調査は教会址東壁の外側を対象に実施し た。2021年調査区を北側に拡張したもので、第1 シャフリスタン東壁の一部(AKB-16区、2017年調 査)を含む調査区である。

まず教会址東壁に直交するように、東西方向にトレ ンチ3ヶ所を設定した(1~3号トレンチ)。その結果、 教会壁面は崩落やその後の居住による改変で欠失が著 しく、教会址壁面や構築面を把えることはできなかっ た。

部屋19の東側に位置する2号トレンチは教会址中 庭への出入口にあたり、トレンチ西端で獣骨に混じっ て多数の鉄製小札、約100点が集中的に発見された。 小札は散在状態で出土し、小札のほか青銅製鋲の類や 鉄製小リングが出土した。また小札集中区には約 10 cm 四方の鉄板状製品が存在し、取り上げ後に観察 したところ、連結した方形の小札2枚で、1枚には表 面に金箔の貼付が認められた。鎧もしくはベルトの飾 りではないかと思われる。



図5 文字資料

部屋 1、7 の東側では、壁ぎわにレベルの異なる床 2 面 $(F1 \cdot 2)$ を検出したほか、灰溜めピットなどを調査した。各床面には炉が 1 箇所存在し、壁面を西壁とする簡易的な居住施設が想定される。

調査区内の各地点で採集された炭化物について、後日、放射性炭素年代測定を実施した。その結果、トレンチ内の小札集中区は11世紀中~後半、教会址壁ぎわの居住施設は11世紀前半、灰溜めピットは13世紀後半の推定年代であった。それらによれば教会の創建年代は不明であるが、11世紀後半代に小札集中区、13世紀後半には居住痕跡、ピットが形成された。小札集中区の形成年代は、11世紀中頃とされるカラハン朝の東西分裂期に相当することから、その頃アク・ベシム遺跡が戦闘の舞台になったことを推測させ、その時点までに教会は廃絶していたと考えられる。なお、教会址東側の斜面では瓦片および文字のある土器片が出土するなど、7~8世紀代の遺物が出土している(図5)。

4. 第2シャフリスタンと砕葉鎮

アク・ベシム遺跡第2シャフリスタンは、中国の唐が建設した「砕葉鎮城」で、679年前後に建設され、8世紀の初めに放棄された唐の軍営地である。

1966年撮影の航空写真によれば、第2シャフリスタンには不整五角形の外周壁と、その中に位置する長方形の内城壁および建物痕跡などが確認できる。しかしながら、1970年代のブルドーザーによる大規模な耕地整備のため、現在では東壁と南壁の一部を除き大部分が失われてしまっている。

この第2シャフリスタン、つまり砕葉鎮城は、唐の 西方進出のために設置された都督府(安西四鎮)の1つ で、唐の勢力がもっとも西に拡大した時期に最西端の 拠点として「砕葉鎮」が設置された。1982年に「砕葉鎮」と記された「杜懐宝碑」が現地農民により偶然発見され、2017年の調査で唐代の瓦が多量に出土したことから、アク・ベシム遺跡第2シャフリスタンがスイヤブ(砕葉)であることが確定的となった。なお史料によれば、砕葉鎮を唐が直接統治した期間は679~686年と692~703年の合計25年間であったとされている。

5. AKB-15 区の調査経緯

帝京大学およびキルギス共和国科学アカデミーは、2017年に第2シャフリスタンの中枢部内、AKB-15区の調査に着手した。地中レーダー探査結果をもとに設定した南北方向のトレンチ内から幅2m、長さ33m以上の直線的にのびる瓦の集積帯(瓦帯)を検出した。瓦帯の向きは真北に対して8°西側に振れており、建物基壇脇に2次的に集積した瓦と推測された(1号基壇)。この瓦帯の構造と広がりを探るため順次サブトレンチを設定し、調査区を拡張した。

2018年の調査では、北端の瓦堆積層直下からL字 状を呈した花柄石敷遺構および塼積散水(卵石散水、 雨落ち)が検出された。花柄石敷遺構は赤、青、緑、 白の円礫を組み合わせて花柄文様を構成し、黄褐色土 面をはさんで北側7mの地点にも塼積散水が確認さ れたことから、卵石散水と塼積散水の間に幅6.5 m ほ どの東西方向の建物基壇(2 号基壇)が想定された。こ の花柄石敷遺構を伴う建物は、内外の使節、客人を迎 え饗応するための施設であったのかもしれない。

2019年の調査では、花柄石敷遺構と重複して検出された10~11世紀代のピットや廃棄坑などの調査を行ったほか、新たな建物基壇面(3号基壇)を確認し、複数の基壇群が配置されている状況が想定された。

瓦帯を中心に出土した瓦は平瓦、丸瓦、熨斗瓦、軒 丸瓦である。軒丸瓦は珠文帯をもつ蓮花文で、6種程 度の瓦当文の型式がある。また平瓦は粘土紐巻き上げ による桶巻き作り4分割で製作され、凹面四隅には分 割界点をもつ。丸瓦は円筒形2分割により製作され、 上端部には連結のための玉縁部がある。また1点のみ であるが凸面に焼成前へラ書き文字「□懐」をもつ丸 瓦が見つかった。瓦帯中には瓦とともに焼土や炭化材 片が多く混入し、炭化物の放射性炭素年代測定の結果、 樹種は針葉樹トウヒ属、暦年較正年代は680~779 cal ADで、砕葉鎮城の構築年代と整合的であった。火災 による建物焼失とその後の片付けが想定される。



図6 AKB-15 区全景



図7 軒丸瓦



図8 軒平瓦



図9 石碑片

6. AKB-15区(2022)の調査概要

2022年の調査は1号基壇の規模や構造、その周辺 を明らかにするために実施し、1号基壇の南西隅を中 心とした基壇構造、周辺の基壇状遺構の存在が明らか となった(図6)。基壇は黄褐色土による硬化した盛土 構造で、基壇回りの外装や雨落ちはなく、階段遺構も 未確認である。南東隅や北側が未調査のため、全体的 な規模については明らかではないものの、基壇の規模 は東西約30m、南北約20mと推定され、中枢域の中 でも最大級の中心的な建物と思われる。また1号基壇

の南側および西側には別の基壇状遺構があり、1号基 壇を取り巻く回廊的な建物の存在が推定される。1号 基壇の南側には基壇に重複するように井戸状の大型土 坑が存在し、土坑内部から瓦や炭化材が多く出土した。 放射性炭素年代測定によると炭化材は7世紀後半~8 世紀後半であった。

出土遺物は瓦や動物遺体が主体を占め、従来未発見 であった軒平瓦が2点、石碑片などが出土した(図 7~9)。軒平瓦の文様は、平瓦の下端面に竹管刺突文 と波状押圧文を施文したもので、唐代の軒平瓦と類似 する。石碑片は赤色砂岩で、獅子もしくは龍の浮き彫

りに鱗や毛のような表現が認められる。そのほかソグド人男性を表したとみられる人形土製品などがある。

7. おわりに

第1シャフリスタンでは2016年から2019年に街路地区の調査を実施してきたが、7~8世紀代の面で一端調査を中断し、2021年よりキリスト教会址に調査の場を移している。教会内部についてはすでに調査が行われ、保存されていることから再調査は難しく、当面は教会址周囲の調査に集中する予定である。

第2シャフリスタンでは個々の基壇群の規模や構造をひとつひとつ解明していく予定で、本年度より本格調査を始めた1号基壇の調査にはなお数次の調査を要するものと思われる。

また2022年夏には出土遺物整理のための調査を行う一方で、山内を中心に玄奘が通ったと推定される天山山脈のペデル峠近くに存在するキャラバンサライを踏査した。これは空中写真をもとに現地を訪ね所在を確認したものであり、付近には墓地とみられる遺構の存在も判明した。2023年以降には、この地点に関する調査を併せて実施する予定である。

なお、本稿は 2022 年 7 月 30 日に開催されたシルクロード学研究会夏(2022)の発表資料(山内 2022、櫛原 2022、平野 2022)をもとに櫛原が執筆したものである。

本報告は、JSPS 科研費 JP21H04984(基盤研究(S) 研究課題名:シルクロードの国際交易都市スイヤブの 成立と変遷―農耕都市空間と遊牧民世界の共存―、研究代表者:山内和也)の助成を受けた成果の一部である。

二註

1) これまでアク・ベシム遺跡の年代は $5\sim11$ 世紀代を中心とすると考えられてきたが、2019 年に調査した AKB-15 区の廃棄坑は、放射性炭素年代測定により $11\sim12$ 世紀代と判明した。また今回報告する AKB-8 区の灰溜めピットの年代は13 世紀前半であり、13 世紀代にかけてさまざまな活動痕跡の存在が想定される。

■参考文献

- · 柿沼陽平 2019「唐代砕葉鎮史新探」『帝京大学文化財研究所研究報告』第18集 43-59頁。
- ・櫛原功一 2022「アク・ベシム遺跡キリスト教会(AKB-8区) の調査」『シルクロード学研究会 2022 夏 資料集』帝京大学文 化財研究所 7-15 頁。
- ・齊藤茂雄 2021「砕葉とアクベシムー7世紀から8世紀前半に おける天山南部の歴史展開―」『帝京大学文化財研究所研究報告』第20集 69-83 頁。
- ・城倉正祥 2021『唐代都城の空間構造とその展開』早稲田大学 東アジア都城・シルクロード考古学研究所 調査研究報告第5 冊。
- ・平野 修 2022「2022 年第2シャフリスタン 砕葉鎮城 (AKB-15)の調査」『シルクロード学研究会 2022 夏 資料集』
 帝京大学文化財研究所 17-32 頁。
- ・山内和也・岡田保良 2020「スイヤブ(アク・ベシム遺跡)のキリスト教会―第8号遺構:キリスト教会複合体―」『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集 247-319頁。
- ・山内和也 2022「2022 年春季発掘調査の概要」『シルクロード 学研究会 2022 夏 資料集』帝京大学文化財研究所 1-6 頁。